

講評 みかんの本文庫『どろんここぶた』

この原作は、アーノルド・ローベルトの他の作品とはちょっとおもむきが違うような感じがしますが、人形劇には適している作品だと思います。

それは、登場人物がこぶたとお百姓のおじさん、お婆さんと少ない割に場面転換が多く、お話がおもしろく展開していくからです。また後半の街の人々がだんだんと増えていくところは人形劇お得意の立絵の手法で効果をあげられそうとか、いろいろな工夫ができそうなところもあります。

舞台はナレーターや生演奏なども交えながら大筋原作に沿って進行していきます。そして一番大好きなどろんこを掃除されてしまったこぶたが怒って家出をしちゃい、どろんこをさがしてとうとう工事中のコンクリートにはまって身動きができなくなります。このお話のポイントはここからではないかと私には思えるのです。それは、文章の中に「みちばたでコンクリートづけになったこぶたをみたことはありませんでした」という、なんとも不思議で傍観者的な記述があり、さらにたくさんの人々があつまり、交通整理のおまわりさん、ついには消防隊まで出勤してこぶたを助け出す。なんとも人を食ったようなとぼけた結末だと思いませんか？ここで作者が何が言いたかったのか、申し訳ないですが私にはよくわからないのですが、すくなくともこぶたにどろんこを取り戻してあげたいという思いは確かにあった事でしょう。

そこで舞台化するにあたっては、「なぜこんなに人騒がせな騒動まで起こしてこぶたにどろんこを取り戻してあげたいのか、こぶたにとってどろんこは何なのか、なぜこぶたがどろんこが一番好きなのか」を見せて欲しいのです。それにはやはり“どろんこ”をどう形象するか、どろんこに浸かってうっとりするこぶたをどう表現するかが重要課題だと思います。今回の舞台はそのあたりでもう少し工夫が欲しかったな一というところではあります。

いつも稽古をしっかりと重ね丁寧な舞台を見せてくれるみかんの本文庫さんの事なので、これからも大いに期待しております。

田山桂子（人形劇団京芸）